



宗森 純
和歌山大学システム工学部

Jun MUNEMORI [正会員] munemori@sys.wakayama-u.ac.jp

1984年東北大学大学院工学研究科博士後期課程修了。工学博士。現在、和歌山大学システム工学部長、グループウェア等の研究に従事。

[No.88]



発想一貫支援システムとともに30年

私はこれまでスマート端末の2画面結合（GDA (Group Digital Assistant) およびG-Pad), GPSを使ったゲーム（電子鬼ごっこ）やガイドシステム（北京 Explorer), 相手の状況が分かるチャット（暇々手帳）や絵文字チャットなど、主にリアルタイムグループウェアのアプリの研究開発を行ってきた。これらはいずれも後述する発想一貫支援システムから生まれたものである。

10代のころ梅棹忠夫の知的生産の技術¹⁾を読み、これは面白そうだとカードシステムを始めた。現在でもカードボックス37個分のカード（1万枚程度）が手元にある。ある日、GPS関係の研究をする学生に昔のカードボックスから適当にカードを取って見せると、偶然GPSアプリの夢が書かれていたカードだったのでびっくりしたことがある。何でもカードに書くことが研究開発につながっていくようだ。

会社勤務の後、平成になってから大学に移り、このカードシステムを計算機システム化しようと考えた。これと発想法とを結びつけて、発想一貫支援システムを作ろうと思い、まず、アイデア用のカード型データベースシステムを作った（後に画面共有とチャットを持つ遠隔ゼミ支援システムに発展する）。できたのが嬉しく、若気の至りでヒューマンインタフェースやグループウェア関係の有名な先生に勝手にアプリを送りつけた。今となっては懐かしいが、恥ずかしい。

このシステムで最初にアイデア入力のために使った機器は電子手帳だった。これをパソコンと接

続してテキストデータを蓄積していく。電子手帳はやがてPDA (Personal Digital Assistant) となり、現在ではスマート端末となって、画像のデータも蓄積できるようになった。これらの入力機器の研究開発から前述のアプリが生まれている。確実に入力用の情報機器は進化しているが、その半面、そのままでは昔のデータが使えなくなっている。

さて、このような発想一貫支援システムの研究をしていると、手作業と同等の結果を出すのが精一杯であり、そのため論文として採録されないことが多く、なかなか研究としては厳しいところがあった。30代のころ、発想支援の論文は日本語で書いていたが、ほとんど採録されないため、思いきって英語で海外の雑誌に投稿すると採録された。おまけにその雑誌を出している出版社から本を書かないかとオファーまでいただいた（その後どうなったかは秘密です）。日本がダメなら外国あり！

研究を始めてから30年たって、アイデアを自分で具体化する支援機能などを付け加え、ようやく単に計算機システム化するよりほんの少し良い発想結果の文章が得られるようになった²⁾。最近、人間の心拍等の情報をセンサで取得して、それを組み込んだシステムの研究をしている。

参考文献

- 1) 梅棹忠夫：知的生産の技術、岩波新書、岩波書店（1969）。
- 2) Munemori, J., Sakamoto, H., and Itou, J. : Development of Idea Generation Consistent Support System that Includes Suggestive Functions for Preparing Concreteness of Idea Labels and Island Names, IEICE Trans. Information and Systems, Vol.101-D, No.4 (2018).

(2018年2月21日受付)